

しべつ 市 政 ル ポ 士別市

(北海道)

サフォーランド・合宿の里・農業未来都市 地域力が育んだ住みよいまち

最北・最後の開拓から120年

北海道北部の中央に位置する士別市は、道立自然公園・天塩岳^{てしおだけ}をはじめとする緑濃い山々に囲まれ、北海道第2の大河・天塩川源流域^{ひよく}の肥沃な大地に開けた、自然豊かな田園都市だ。

昭和29年7月に旧士別市として市制施行。平成17年9月には隣接する旧上川郡朝日町との合併により、新生・士別市としての歩みをスタートした。

令和元年となった今年は、明治32年（1899年）年にこの地に開拓の手が入ってからは、ちょうど120年の節目に当たる。同時に明治2年（1869年）に蝦夷地から北海道へと改名されて150年目。北海道最後の開拓地ともいわれる士別市は今年、歴史的な節目の重なる、まさに記念イヤーを迎えた。「士別への屯田兵の入植は、屯田兵制度に

よる北海道開拓の最後の事例となりました。

そして士別は屯田兵が開拓した土地の中でも最北の地でした。アイヌ語で大きな川を意味する《シベツ》が語源となり名付けられた士別という地名は、まさに『天塩川の源流域に開けたまち』を意味しているのです。

冬季の自然が厳しい北海道の中でも、士別は特に寒気が強く積雪量の多い内陸部に位置し、屯田兵が入ることのできた最北部です。ろくな装備しかなかった時代に当地を開拓してくださった先人たちが、どれほどの苦勞をされたのかは、想像を絶します。

それだけになお一層、現代に生きる私たちは、先人が大切に守ってきた自然環境や積み重ねられた歴史、育まれてきた文化を次世代に継承していかなければなりません。誰もが生き生きと暮らすことのできる住みよい地域づくりを、未来永劫^{えいこく}、持続するよう努力をしていく。それが現代に生きる私たちの使命と考えております」

まきの ゆうじ
牧野 勇司
士別市長



そう語る牧野

勇司士別市長も、

市長就任から今年で3期10年の

節目を迎え、昨年4月に市民協働で策

定・施行した「士別市まちづくり総合計画」

に基づくまちづくりを、精力的にけん引し

ている。「士別市まちづくり総合計画」のキー

ワードは、『地域力』の結集だ。

「私たちがいう『地域力』とは市民をはじめ、自治会、NPO、企業、行政など、地域における多様な主体が相互に連携し、地域課題を自らの努力で見つけ出すとともに、



士別開拓の原動力は北海道第2の大河・天塩川が形成した肥沃な大地

自らの努力で解決していく力の総体を指しています。その上で豊かな地域資源を基盤に、地域の産業を振興し、外部との積極的な交流などにより、持続可能なまちづくりを目指していきたい。

人口減少が否応なく続くこれからの時代、その抑制は全国共通の課題です。中でも士別市は、全国有数の面積(約1120km²)を有している半面、現在の人口は約1万9千人。2060年の人口は8110人と推計されて



白一色に染まる士別市の厳冬期

います。一部の予測では将来的な消滅都市候補ともされていますが(笑)、私たちは全力を尽くし、『地域力』を挙げて、持続可能な郷土を実現していくつもりでおります。

そのために必要なものは何か?それは当市が培ってきた『わがまちの個性』をさらに磨き上げ、継続発展させることなのだと考えます。そしてそれを士別市の確固たるイメージとし、全国に発信していくために、現在さまざまな施策・事業を実施しております(牧野市長)

具体的な「わがまちの個性」として、士別市が掲げるのは【サフォークランド士別／合宿

の里／未来型農業実践のまち／自動車等試験研究のまち／生涯学習のまち／水とみどりの里」の6項目だ。

協働のまちづくりの原点 《サフォークランド》

観光・交流面のみならず、士別市のシンボルとして、そのイメージ核になっているのは何といっても、サフォーク種の羊たちの存在だろう。顔の黒い羊として人気のサフォーク羊を、まちづくり(活性化)の起爆剤にしようとする取り組みが始まったのは昭和57年のこと。そもそも「農業の複合経営」を目指すべ





士別市の代名詞となっているサフォーク羊の群れ

く、昭和42年にオーストラリアからサフォーク種の羊100頭を輸入し、一部農家が飼育し始めたのがきっかけだった。

その後は採算性などの問題もあり、なかなか飼育頭数が増えなかった。しかし、青年会議所を中心に、日本では当時珍しかったサフォーク羊をまちの顔にしようとの機運が高まり、昭和57年に市民主体の《サフォーク研究会》が立ち上げられたのだ。

ちなみに日本を代表する世界的な人気作家・村上春樹氏の出世作『羊をめぐる冒険』(昭和

57年10月刊行)は、士別市のサフォーク羊の牧場を昭和56年に取材した後に書かれた。士別市観光協会によれば、ベストセラー『羊をめぐる冒険』の刊行と、サフォーク研究会の設立が同じ時期になされたのは全くの偶然だそうだが、初期・村上春樹ファンの間では士別市の好感度は今も高い。

そうした多様な時代の追い風も取り込みつつ、サフォーク研究会の試みは実を挙げていく。羊肉や羊毛の素材、また、まちのイメージキャラクターとして、多彩な形でサフォーク羊を前面に押し出すことで反響が生まれ、昭和60年には羊毛を使った各種製品の製造会社「(株)サフォーク」が市民有志の出資で設立されるに至った。

士別市もこうした市民の動きに敏感に呼応。30種の羊を飼育する『世界のめん羊館』やレストランが併設され、シーブドッグショーや羊の毛刈りなどで人気の『羊と雲の丘』など、士別市の豊かな自然環境を活用した「羊をめぐる観光施設」を整備した。平成17年には、こうした官民の取り組みを改めて一体化し、サフォーク羊によるまちづくりをより活性化するため《サフォークランド士別プロジェクト》を開始。後に述べる《合宿の里》を中心とする《交流促進プロジェクト》とともに「頑張る地方応援プログラム」の対応プロジェクトとして再編され、現在に至っている。

「《サフォークランド士別プロジェクト》は、まさに官民総出で知恵を出し合い推進してい



市民有志が設立した(株)サフォークのショップには羊毛製品がズラリ

る事業で、サフォーク羊の生産体制の合理化や拡充、超低温急速冷凍技術による肉質を変化させない保存法開発など、成果も次々と出ています。さらに地域ブランド羊肉《士別サフォークラム》の発信や多彩な調理法の創出、羊毛製品のデザインや技術のレベルアップなど、多彩な取り組みを実施しています」(牧野市長)

サフォーク羊をまちの顔とする地域活性化は、このように長年にわたる市民協働事業として、地場産業の創出事業としてもすっきり定着。今なお、まちのイメージづくりに大きく貢献している。

「また『羊と雲の丘』は文字通り、北海道らしいなだらかな丘の上に築かれた施設ですが、積雪に覆われる冬季になると『スノーモ



士別市で行われるスポーツ合宿はハイレベル



北海道で唯一開催されているオリンピックデーラン(本年6月23日)



真夏の腕試しとして有力選手の出場も多い士別ハーフマラソン大会

合宿の里がもたらす豊穡な市民力

「夏涼しく爽やかな士別市は、冬季には積雪と厳寒に見舞われ、年間の寒暖差は最高で60度近くにもなります。先人が士別を開拓する際には、この寒暖差が大きな障害になったことでしょう。しかし先人たちの開拓の成果として、今ある住みよい大地の基盤の上に、基幹産業である農業と観光の両面で確かな地歩を築くことができています。日本中のアスリートや文化活動をされている方たちが士別市を合宿地として評価してくださるのも、その結果の一つといえます」(牧野市長)

「夏涼しく爽やかな士別市は、冬季には積

雪と厳寒に見舞われ、年間の寒暖差は最高で60度近くにもなります。先人が士別を開拓する際には、この寒暖差が大きな障害になったことでしょう。しかし先人たちの開拓の成果として、今ある住みよい大地の基盤の上に、基幹産業である農業と観光の両面で確かな地歩を築くことができています。日本中のアスリートや文化活動をされている方たちが士別市を合宿地として評価してくださるのも、その結果の一つといえます」(牧野市長)

いる。その結果として、例えばスポーツ合宿だけでも平成30年は、士別市の人口を上回る延べ2万5千人が訪れた。

マラソンの実業団チーム、重量挙げの日本代表チーム、スキージャンプの代表チームなど一線級のアスリートをはじめ、年間を通じて多彩な専門性を持った人たちが合宿に訪れる効果は非常に大きい。地域スポーツ振興への寄与だけでなく、こうした外部人材との交流による刺激は、士別市の個性の一つ《生涯学習のまち》としての市民のモチベーションにも、多大な貢献がなされているはずだ。

そしてスポーツ合宿などで培われた士別市とスポーツ界の絆は、今年6月11日、「JOCパートナー都市協定」の締結調印という形で新たな段階を迎えた。

「士別市では昭和62年から毎年、JOC(日本オリンピック委員会)がIOCの創設日(オリンピックデー)である6月23日に行う《オリンピックデーラン》の道内唯一の開催地であり続けてきました。今年からは令和に元号が代わり、さらに屯田兵入植から120年の節目を記念する《オリンピックデーラン》となり、1千人の市民が12人のオリンピックや



JR宗谷本線・士別駅の周囲に残されたレンガ倉庫群

パラリンピアンとともにジョギングやウォーキングを行い、祝福してくださいました。それも『合宿の里』として長年にわたり、アスリートの皆さんとの絆を深めてきた歴史があるからこそです。これを機会に今後さらに『合宿の里』を『合宿の聖地』へより深化させるべく、市民をはじめ関係各位とともに、努力を続けていきたいと思えます」(牧野市長)

来るべき2020東京オリパラに向けては、国が進める「ホストタウン構想」に応募し、平成28年に登録された。翌29年に重量挙げの強豪・台湾(ウエイトリフテイング協会)との間で「士別市ホストタウン交流事業協定」を締結。台湾とは2020東京オリパラのホストタウンとしてだけでなく、文化・スポーツ両面の交流事業など包括的な関係を継続し



市立博物館の庭に保存されている屯田兵屋(屯田兵が家族で暮らした家)

ていくことになっている。

自動車等試験研究のまち

士別市の《わがまちの個性》の中でひとときユニークなのは、『自動車等試験研究のまち』としての顔だ。

「これも広大な土地と、夏冬の最高寒暖差が約60度にもなる自然環境のダイナミックさがもたらした、個性の一つといえるでしょう。士別市の冬の寒さや積雪は、自動車関連メーカーのエンジン性能やタイヤ性能などのテストにはぴったりなんです。」

そうした土地柄に着目した自動車関連メーカーなどが、昭和55年ごろから、士別市で寒冷地の試験研究を行うようになりました。そ

して昭和55年にトヨタ自動車が生別試験場を建設したのを契機に、ダイハツ工業やヤマハ発動機(スノーモビル)、ブリヂストン、ミシランなどが次々と本市に試験研究所を設置しました。平成30年度は、士別市を訪れた研究員の数が延べ2万6千人を超えました。中でもトヨタ自動車が車両開発などを行うテストコースは、周囲が約10km、直線4kmもあり、これは世界有数の規模を誇っております」(牧野市長)

農業未来都市がもたらす持続可能なまち

屯田兵が開いた士別市の広大な平地は、言うまでもなく営農が最大の目的だった。現在では「うるち米」の北限域の生産地として知られるが、昼夜の寒暖差が激しく年間を通じて涼しい気候は、大正時代にどんぶり製造をこの地に根付かせ、昭和に入ってから砂糖の原料となるテンサイ(ビート)作りを根付かせた。

そんな中、士別市のこれからの農業を担うと目されているのが、大区画ほ場(平均3・4ha)を基盤とする大規模営農だ。その仕組み作りとして、平成21年度から上士別地区で始まったのが、「上士別地区国営農地再編整備事業」である。

「水稲を中心に畑作、野菜、酪農、畜産など多種多様な顔を持つ本市の農業経営は、まさに北海道農業の縮図です。この魅力的な農

業基盤を次代へ継承するため、特にお米の生産基盤と地域コミュニティとしての農村集落機能を次代に継承していくことを目的に始められたのが、上士別地区の国営農地再編整備事業なのです。

効率的な大規模ほ場(最大ほ場は6・8haで北海道一の広さ)を整備し、地区内に四つの集落経営体を組織することで、エリア内の離農跡地を集積。米のブランド化や6次産業化などを図るために、四つの集落経営体が効率的に連携するとともに、新規就農希望者の受け入れや育成もしています。

また、水田ほ場の大型化によるスケールメリットをより生かすため、今後はICT技術を積極的に導入し、生産過程のICT化(ロボット化)を図り、生産効率をさらに高めています。



児童館、放課後児童クラブ、障がい児のための放課後等デイサービスセンター、児童相談支援センターが合体した「ほくと子どもセンター」は全国福祉関係者の注目の的

きます。結果的に肉体的負担が軽減されることなどから、新規就農希望者にも優しい農業が実現し、農業を媒介とした移住・定住者の増加も見込まれます。まさに将来へとつながる、未来型農業の実践といえます(牧野市長)

また士別市における移住・定住の促進に向けた施策でひとときユニークなのは、始まったばかりの産学官連携の《移住入学制度》だ。札幌の指定介護専門学校に入学する学生を対象として、卒業後に士別市内の介護事業所に就労することを条件に、学校と事業所が奨学金を支給し、士別市が学校や事業所を支援する仕組みだ。また、対象となった学生にも就労の際に士別市に移住することで、さまざまな移住特典(助成金など)を付与する制度となっており、令和2年度入学生を対象に募集したが、移住・定住制度の新しい試みとして今後の推移が注目される。

さてJR宗谷線・士別駅を降りると、すぐ右側に並んだ、開拓時代の名残を伝えるレトロなレンガ倉庫群が訪問者を迎えてくれる。

そして駅前から延びるメインストリートを進み、市立病院の背後の丘を尾根伝いに進めば、屯田兵たちが入植直後に創建した士別神社の鎮座する九十九山(つくもやま)に至る。士別神社に至る直前の尾根道からは、碁盤の目にきれいに整備された街並みが一望できる。

街並みの向こう側の丘にはサフォーク羊が暮らす『羊と雲の丘』や、屯田兵の暮らした家(屯田兵屋)が保存される士別市博物館の丘がある。

九十九山の麓には屯田兵たちが暮らした旧《屯田・兵村》地区が広がる。九十九山の裏側には、天塩川が流れ、開拓の母なる川・天塩川の水を引いて造られた「つくも水郷公園」がある。

屯田兵の開拓の開始から120年——。士別市の初秋の街並みはナナカマドの茜色がアクセントとなり、静かにたたずんでいた。東洋経済新報社「住みよさランキング2019」で北海道総合第2位に位置付けられたことが納得される端正な雰囲気この街もやがて白一色になり、また春が訪れる。士別市の持続可能なまちづくり(未来志向の新たな開拓)への歩みは、毎春の訪れのように倦まず弛まず(たふ)続いていく。

(取材：文＝遠藤隆／取材日 令和元年9月30日)



建設が進む市役所新庁舎(来春完成予定)